

歴史的假名遣臆解 生れと育ち

いちかは ひろし
市川 浩

吾ら文語の苑も設立より十七年を経て愈々雄飛せんとなす。然れども其の文語表記の基本たる歴史的假名遣の衰頹甚しく、「今や誰も讀めず、書けざる舊かなに拘りては、我らの運動も限界ならずや」の論漸く高まらむとなす。然る程に當苑活動の一環として、各地にて開催せらるゝ歌唱の會に文語の歌詞比較的多きに鑑み、當苑より歌詞と解説を印刷配布の事あり。當然文語歌詞の表記は正統の歴史的假名遣にて提供し、大いに感謝せられたり。これに氣を良くし、歴史的假名遣の解説書を創らむとて、小生に其の原案作成を依頼せらる。

其の内容は完成後御覽頂かむに、解説方針に就き臆斷の由りて來たれる背景に就き記さむ。敗戦翌年の「現代かなづかい」を経て「現代仮名遣い」は今日まで國語の現代口語體を支配して七十四年に及ぶ。この間「現代仮名遣い」の可否に就き論争絶えざるも、孰れも互ひに他を批難し合ふの、國論分斷に陥る多き中、行政著々と既成事實を積み重ね、遂に令和四年より施行豫定の高等學校學習指導要領には、「歴史的假名遣」の語現出する事さへ皆無となりけり。かゝる事象をたゞ慨歎慷慨したりとて何の益かありなむ。我々は先づ假名其のもの「用」即ち働きの再觀察より始めざるべからず。戦後の主潮として、書き言葉は話し言葉の記録のために發生せりとし、其の價値は如何に正確に音聲を記録するかでありとす。此の前半は特に異議の餘地無しと雖も、後半は「生れと育ち」を觀る立場よりせば、其の言語の歴史的貫性も評價の對象となり得べし。其の意味に於て假名文字を十行五段に表現せる五十音圖こそ國語書き言葉の音聲的特徴を表現し、同時に話し言葉からの獨立宣言ともなれ。之を無用とする「現代仮名遣い」さへ實は其の作用から遁るゝ能はざるなり。一例を擧ぐるに歴史的假名遣に對する代表的批判として、同じコウの發音に對してかう、かふ、くわう、こう、こふ、こほるなど六種の表記の別有あるは繁雜にして無用なりとす。然れどこは假名遣とは關係なく、右記の如き假名の接續あれば、音聲的にはコウに收斂する事を示すなり。しかも五十音圖のア段の假名にう、ふの二字の孰れかが接續せば同行のオ段の長音に變化する法則性さへ認めらる。又「現代仮名遣い」にてはいふをいうと表記す。されど五十音圖はイ段の假名にう、ふが接續せば拗音化し且つ長音化す（此の場合はいゆう）とす。即ちいうは必然的にゆうとなるを豫言す。それだけ「現代語音」との乖離増加するのみならず、語幹いは終止、連體の二形のみゆとならざるを得ず、文法體系の破壊も懸念せらる。

かゝる考へは五十音圖に親しまば自づから生じ、話し言葉と書き言葉を表裏一體のものとして認識するに至るべく、我國古來より傳承せられけり。之を捨て近代式の書き言葉下位論の教ふる儘に假名遣を忘却せるは惜しみても餘りあり。近代言語學の先達ソシユール先生曰く、

それでは慣用的正書法を音聲學的字母と取代へてはどうか？この興味ある問題も、（中略）；我々に云はせれば、音聲學的書法はもつぱら言語學者の役に立ちさへすればよいのである。（中略）言

語教授の上で音聲學的字母が役に立ち得るとしても、その使用を一般化することはできないであらう。（一般言語學講義・序説7章§2 音聲學的書法）

それ故、書の欺瞞的性質を認めた上で、眞つ先になすべきことは、正書法を改革することだと思ふのは誤りである。（同・序説7章§3 書の證言の批判） 共に小林英夫譯

嗚呼！

（引用部の表記は地の文に統一）

（令和二年七月二十九日）